

作文はなぜ知的独立性の問題になるのか

—— 鶴見俊輔, 生活綴方, 想像力 ——

谷 川 嘉 浩

京都大学大学院 共生人間学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 本稿は、経験を書くこと、生活を記録することをめぐる鶴見俊輔の思想を探索する。彼の思想を貫くのは、日本の知識人が状況変化に応じて態度転換していったことへの批判である。その場の解答をなぞるだけの優等生は、知的独立性を失いがちなのだ。これへの対処として、自身の経験に基づく作文に鶴見は注目した。本稿の目的は、自己を含む状況全体を相対化する契機を、鶴見がどのように確保したのかを明らかにすることである。彼の「方法としてのアナキズム」に基づき、生活綴方論以降の彼の作文論で、当初の想定と現実との齟齬への注目が重視されること、そして、齟齬と対峙する人間の力を「想像力」に帰したことを明らかにする。さらに、想像力が繰り返し立ち返る場となるように、鶴見が提出した経験を書く際の基準について、後年展開された彼の文章論を踏まえて論じる。

1. は じ め に¹⁾

鶴見俊輔。彼は 1922 年に生まれ、2015 年に亡くなった。父に政治家・政治評論家の鶴見祐輔、祖父に後藤新平を持つ政治家の家系であり、彼は多くの政治家や政治関係者を間近に見てきた。思想家としての業績は、武田清子・武谷三男・丸山眞男らと立ち上げた雑誌『思想の科学』や、『転向研究』などの共同研究が有名だ。加えて、「十五年戦争」という言葉・見方を作った、夢野久作をいち早く評価した、低俗視されていたマンガを研究の俎上に乗せるのに一役買ったなど、一般にはあまり知られていないが重要な仕事もある。思想家・鶴見の影響は、事程左様に大きい。とはいえ、本稿で注目するのは、以上のような側面ではない。

心理学者の河合隼雄は、桑原武夫と交わした鶴見についての会話を書き留めている。

「ああ、鶴見は天才でっせ」と〔桑原に〕言

われる。そこで、先生は天才と秀才をどうして見分けられますかとお尋ねすると、「天才は……自分に不利なことでも平気で喋る」、「秀才は自分が損するようなことは上手に隠す」とのことである。²⁾

私たちがここで関心を示したいのは、自分に不利なことに注目する鶴見の身ぶりである。実際、過去の不逞行為、戦中の体験、自身が批判された経験などに繰り返し言及しているように、鶴見の語りには、確かにそうした傾向が見られる³⁾。このことは、鶴見の思想の中でどんな位置を占めるだろうか。

鶴見は、「秀才」や「優等生」を徹底して批判してきた。彼の考えでは、優等生は「一番になる人はいま世間で何が一番なのかという考えから出発する」ので、時代の流れに合わせてころころと思想を乗り換える「一番病」に罹っている⁴⁾。従って、優等生は、「自由主義が流行れば自由主義の模範答案を書き、軍国主義が流行れば軍国主義の模範答案を書く」⁵⁾。このように、勉強は優

秀だが「自分で考える力はない」「一番病」の優等生に、鶴見は反感を示してきた。上の引用は、こうした彼の発想を桑原が反復したものと言ってもよい。対比から示唆される通り、秀才が決して間違わない「模範解答」に飛びつくのに対して、彼の提示しようとする立場では、自分の過去の言動と率直に向き合う——不利であっても——ことが必須である。

本稿では、「自分の経験を書く」ことをめぐる鶴見の議論を軸に議論を進める。それにより、自己の過去について書く／言語化することをめぐって、自己において、自己を超えていく視点をどのように確保したのかを明らかにする。その際、「自分に不利なこと」にどう対峙するかが重要な論点になるだろう。まず、鶴見が、キャリアの初期に、生活綴方を評価した文章を見ていく。

2. 理論と実感の隘路

——生活綴方と、1956-8年の鶴見俊輔

山村の中学生たちの綴方（作文）集『山びこ学校』が1951年に出版されると、直ちに評判を呼んだ。社会科教師の無着成恭が編んだ綴方の記録は、類似の試みをしていた教師や後進の教師を励まただけでなく、教育学者や社会学者らに大きな衝撃を与えた⁶⁾。『山びこ学校』によって再注目された生活綴方は、戦後日本社会の行く先が模索されていた時代に、教育という文脈を超えて、一つの希望であるとみなされるようになる。その衝撃を受ける形で、鶴見らの主宰する思想の科学研究会は、1953年、「生活綴方運動の問題点」と題して、2日に渡る講演会・討論を行った⁷⁾。この中で、鶴見の生活綴方論は研ぎ澄まされていくとはいえ、十分な分量で展開されるのは、1956年の『現代日本の思想』、そして、1958年の「プラグマティズムと生活綴方」（『生活綴方事典』所収）および『戦後日本の思想』を待たねばならない。

『現代日本の思想』において、生活綴方の基本的特徴は、生きられた経験から始めて書くことにあると彼は主張した。実際、生活綴方の主要語彙のいくつかを生み出した鈴木三重吉は、彼の理論

的な著作でこう述べている。

私は、綴方において、以上の〔＝忍耐、国旗、春のような〕無意味な空想、概念、智識……の取扱いを排除するために、私の綴方改革の出立において、はじめて綴方は「生活の記録である」という言葉を使って強調したものである。……いきた実際生活の上の、直接の経験、直接に見たこと聞いたこと、事実について感じたことをかかせるのでなければ……効果が上がらず、ぴちぴちした具体の事象を扱わなければ牽引のある、真実な作品は得られない上に、製作の快味もないことを指摘したのである。

ここにいくつか補助的な指摘が付加されるにせよ、上の文章は、鈴木の基本的な見方を示すものと言えよう⁸⁾。

鈴木や芦田恵之助といった指導者が生活綴方の基本線を作ったとの見解に立ち⁹⁾、鶴見は、生活綴方の可能性と限界を指摘する。彼らの方針（自由選題）では、各人は「自己の自由意志」によって作文の主題を選び、「自分の納得するかぎりでその主題の展開」を進めていく¹⁰⁾。この方針が機能する限り、個人の実感と突き合わせることで、抽象的な概念をくだく契機が生まれる。こうして自分の無理解を隠さず、実感に即して抽象物を吟味していく綴方の姿勢を、鶴見は高く買った。『現代日本の思想』の鶴見にとって、生活綴方は、「時代の気分の動きに流されぬだけの自分の実感の上にたつ」可能性を開く手法だと見えたのである（G, 98）。

とはいえ、生活綴方運動に、何らかの形で集団性の強調が付け加えられるとしても¹¹⁾、やはり自己を軸とした作文の方法である点是不変なことには注意する必要がある。というのも、その特徴ゆえに「わずかではあるが、最後まで故障がのこる」からだ。生活綴方では、「自己の個別的体験をもととして理解を一般化していこうと考えるため」、「自己の体験」に具体的な翻訳が可能である限りにおいてしか、体系的・理論的な視点を受け入れることができない。こうした認識の下、当時

の鶴見は、生活綴方が素朴な実感の枠に囚われかねない点を批判し、それが理論的視点で補強されることを望んだ。(GS, 113)

こう指摘した『現代日本の思想』(1956)以降、鶴見の生活綴方観は更新されただろうか。少なくとも、翌年の座談(1957)はこの枠を超えるものではない¹²⁾。座談での議論は、印象論的な指摘に留まっている。彼の生活綴方批判は、丸山眞男の「日本の思想」(1957)を経由して初めて、理論的な明確さを帯びていく。

丸山は「実感信仰」と「理論信仰」という概念対を組み立てた¹³⁾。自己の生み出す自然な「心情」「美感」「生理」の有効性を絶対化する立場(＝実感信仰)と、抽象的な理論にフュティッシュに固執する立場(＝理論信仰)が、状況主義的に現状を追認し(N, 20)、理念と事実を安易に調和させる(N, 59)という点で共犯関係にあり、この悪循環が日本社会を支配している、というのが丸山の指摘だった。

鶴見は、状況主義的に考えをひっくり返す優等生的な理論信仰に強い違和感を抱き、それに対する対処として、生活綴方の「実感」ベースの姿勢を評価したのだった。しかし、丸山の議論からすると、生活綴方はある種の実感主義であり、理論主義と共犯的な関係を持ち、素直な現状肯定を採る「無責任」をもたらしかねない。実感と理論を並行させることで、現状追認的な無責任に対処しようとした鶴見は、結局、『日本の思想』で批判された議論の輪郭をなぞったに過ぎなかった。彼は、この事実を重く受け止めた。

「プラグマティズムと生活綴方」(1958)では、生活綴方は、「コトバの意味を自分個人の实感と結びつけて捉える」がゆえに、抽象的な言葉を別の抽象的な言葉で置き換える理論主義から距離をとるものと評価される。しかし同時に、それが丸山の言う「実感主義」に陥る危険性を強調する¹⁴⁾。この視点は、『戦後日本の思想』(1958)で端的な表現をとった。実感から始める生活綴方は、様々な状況を区別なく、ずるずるべったり受け入れる姿勢があり、結果として、状況全体への「批判精神」、つまり、日本や現在の社会を「全体としてつっぱなす視点」に欠けかねない、というのだ。

問題は、「理論か実感か」の選択で間違わないことでもなければ、「理論と実感の両方を重視することでもない。この対立軸で思考する限り出口はない。むしろ重要なのは、自身もその内にあるところの状況全体に対する批判的視線があるかどうかである。要するに、状況を相対化する契機があるのかという点に、生活綴方の問題の核心がある」という見解に鶴見は至ったのである。¹⁵⁾

生活綴方、つまり、自己の経験を書くことをめぐって、上記の見解に立った鶴見が示した突破口は何だろうか。鶴見に見出され、『思想の科学』でデビューした評論家の佐藤忠男の文章論を経由することで、鶴見の議論が持つ含意が明確になると思われる。次節では、佐藤の議論を検討した上で、鶴見の見解を探索する。

3. 想像力のほうへ —— 佐藤忠男の生活綴方論

映画評論家として知られる佐藤忠男は、『少年の理想主義』や『権利としての教育』によって、教育評論家としての地歩を固め¹⁶⁾、生活綴方について論じた¹⁷⁾。鶴見とは異なり、佐藤の生活綴方論は、「理論と実感」という対立軸に囚われていなかった。

佐藤は、生活綴方に異質な流れが合流した結果、混乱が生じていると指摘し、それらを分けて考える必要性を説いた。それは、「芸術と科学は別のものである。詩と散文とは別のものである。まずこの区別をはっきりさせなければいけない」という言葉に要約される(S, 93)。この診断はどのような発想に由来するのだろうか。

国分一太郎など戦前の弾圧下で生活綴方を推進した人びとは、「観察から科学へ、という道筋を望んでいるらしい」と、彼らの理念を確認することから佐藤は始める。そこにあったのは、「上から与えられる非合理的な観念より、自分の眼で見た現実を信じてくれ、ただしそこから批判的な論理を発展させてゆくことは禁じられているが、そのギリギリのところまで自分で見てくれ」という信念だった。(SR, 83)

とはいえ、異なる道筋を望む向きもあった。

「作家の鈴木三重吉の『赤い鳥』による芸術的綴方運動や、そこから出た豊田正子の『綴方教室』などを、芸術至上主義的な作家の川端康成あたりが絶賛する」という流れのことだ。子どもが綴方を書くとき、大人の普段問題にしない「生活の細部」が捉えられ、刻銘に記述されることがある。「子どもにとってはそれが生活上切実なものであるが故に」、彼らの文章には、生活の細部が生々しく反映される——彼らは、その点を褒めそやした。佐藤の見るところ、こうした異なる二種類のプログラムの曖昧な混じり合いが、生活綴方運動の弱点なのだった。

……観察から科学的認識へ進むことを目標とする国分一太郎の流れと、観察を鍛え上げることが芸術になるという鈴木三重吉や川端康成の流れとが、世にもてはやされるままに相互の対立点をぼかして合流してしまったところに致命的な弱点があった。

異なる動きが合流すること自体は責められるべきことではない。彼は結局何を批判していたのか、(SR, 83-4)

補いつつまとめると、佐藤の文章観は、次のような内容である。俳句や短歌の叙情的伝統を生きた正岡子規や高浜虚子のような人びとが、写生文(スケッチ)作家として、冷徹な記録と芸術性を両立させるような文章観を創出したのだが、それが自然主義作家だけでなく、自然主義に反対した志賀直哉のような作家の文章観にすら影響を与え、「そうした文学の下で学んだ今日の教育者たちの文章観まで規制している」。その発想から帰結するのは、どんな深刻な生活経験ですら、それを見据えて、「やがて一幅の静止した情景にきちんとまとめてみせ、つきはなして眺めて憩いをとることができる、という精神のあり方」である。問題なのは、「なまじ、理屈をこねはじめると、対象は一幅の静止した情景にはまとまらな」くなることであり、結果として、理屈や論理を軽視する風潮がもたらされた。(SR, 84)

既存の道徳観の偽善に抗して、現実を冷徹に直視することを主張した自然主義文学の運動が、結

局は、「その厳しい現実がいかに耐えるか、という覚悟の美学のようなところに一様にはまりこん」だ。そして、生活綴方は、自然主義文学と同じ轍を踏んだ(S, 87)。生活綴方が採用した文章観は、「厳しく対象をただ写し取るだけに自己を限定する」ことによる「人生に対する覚悟」の修養(SR, 85)を目指すナルシズムに容易に転落したのである(SR, 87)。結果として、観察や分析の鋭さではなく、「あふれた倫理的情感」や、分析に欠けた「情景」が評価されるようになった。(SR, 93)

リアリスティックな観察の積み重ねから、やがて社会人や人生に対する科学的な認識の芽生えてくることを念願していたにちがいない。が、しかし、有名な小説家なんかにはめられて、その芸術的評価を喜んだとき、観察から論理へ、という道は自ら封じてしまった。(SR, 85)

こうした認識に立った佐藤が提示した処方箋は、文章訓練の際に、詩と散文を異なるスタイルとして扱うことである。どういうことだろうか。

「綴方教育は、観察の正確さの上に、もっと緻密で分析的な論理の使い方が加えられるべき」だと述べ、ある種の書き方の形式に習熟し、論理や分析の訓練に徹することを提案した。その一方で、「詩教育は、目の前に見える事物の正確な再現など綴方教育のほうにまかせて、人間の内面の追求に向かうべき」だとして、芸術性の追求を提案した(SR, 93)。要するに、佐藤は両者の重要性を認識した上で、分けて考える必要を指摘したのだ。¹⁸⁾

佐藤は、その後の著作でも、「散文の生命は論理である」(SR, 82)という見解を掘り下げている。例えば、『言葉の論理と情念』では、既存の生活綴方が、「自分の言いたいことをいう訓練」でありながら、「主として状況の描写やそれに対する心情吐露という方向に向いていて、自分の主張をたんなる気持ちとしてではなく、理屈として述べるという訓練にはなっていない」と批判する。理屈軽視の「問題は国語教育だけではなく、現代

日本の言語生活の全体にかかわる」として、佐藤は、公共空間で批判的な議論を可能にするべく、散文的論理の教育を要請している¹⁹⁾。

それに対して、詩教育はどう論じられたらうか。佐藤は、ある児童詩が「学校生活の不条理」という題材を、適切にも現実への忠実さを離れて描いた点を評価する。素朴な自然主義では、「道徳的な粉飾で真意を隠して自分をよい子にし、そこで感じた激しい憎悪、敵意などは自分で抑圧してしまうものだ。そういう抑圧の悪しき結果は、……よりずるがしこい世間知を身につける方向に自分を向けることになりやすいだろう」。しかし、この作者は、「想像力を自由に流露させ」て不条理を表現したことで、「その憎悪、その敵意を、偽善的に抑圧することなく、公然と表明し」、「しかもそれを、ユーモアに昇華させて自我の純粋さを確保した」²⁰⁾。(SR, 91)

ここでいう想像力は、益体もない「おとぎばなし」や「とてつもないこと」を思い浮かべる能力なのだろうか。そうではなく、想像力は、理想の自己と、それに届かない現実の自己という二重性に対峙することだと佐藤は述べる。想像力とは、

現実にある自分と本来あるべきだった自分、それを区別しながら、しかも絶えず有機的にかかわり合わせておくことができるような精神の力なのである。

彼によると、さらに重要なのは、想像力が「自我を現実追従から自由にし、自分の精神を自立させる」働きを持つことである。想像という一見無駄なレイヤーを媒介することで、現実の受動的な追認を避け、自己の独立性——それゆえ、状況に対するある種の批判精神——を立ち上げることが可能になる²¹⁾。(SR, 92)

以上の見解から鶴見の議論に立ち返ると、どうなるだろうか。かつての鶴見は、田山花袋や徳田秋声よりも「もっと冷酷な自然主義」として、豊田正子の『綴方教室』『粘土のお面』などの生活綴方を評価した(G, 90-1)。これは、まさしく佐藤が批判した文章観に通じている。そこでは、厳しい現実に対する覚悟という装いの中で、ある種

の自己陶酔的な粉飾・美化が生じかねないだけでなく、結果的に、現状追認的に振る舞う姿勢に加担しかねない(cf. S, 91)。このように、鶴見の古い生活綴方理解には、彼が自覚した以上の難点があるのだ。とすれば、鶴見の生活綴方論には、立ち返るべき美点がないのか。

ここで、論理や精密さを補助線にしよう。鶴見は、過度な厳密さを求める立場に反意を示していた。その意味で、鶴見は、佐藤の言う散文精神を積極的に論じていない。例えば、鶴見は、経験の分析を経て得られた記述に基づいて築かれた堅固な知的体系の精密さ・十全性を、無批判的に信頼する姿勢に疑問を差し挟んでいる。経験を分析することは重要なのだが、そうした精密な知識の運用には、常に「常識」という曖昧な「背景を必要とする」からだ。こうした見解を、「精密さは、いつわりのものである」というホワイトヘッドの言葉で彼は要約する²²⁾。

近代日本の学問のあり方を語った文章では、より踏み込んだ見解を提示した。翻訳語を中心とする学術語のように、「一語一義」式で厳密さを標榜する思考は、ある言葉に「平坦な一つの意味」しかないと捉えている。しかし、こうした固定的な体系は、「意味の重層性と揺れ」への認識が欠けている。美術史家のエルンスト・クリスを引きながら、「原子」のような言葉ですら、精密となるのに「2500年の時間がかかっている」ように、どのような記述も、(少なくとも潜在的には)別の仕方では捉えられうるし、その捉え方も変化していくのだと鶴見は指摘する。一対一対応で模範解答を固定し、変化を許容しない人びとは、その都度の模範解答に飛びつくくらいがあり、かえって「状況の転換期にひっくり返っ」てしまう。大正期に政治家の家系に生まれた鶴見は、知識人や文筆家が配給される「正解」にたやすく飛びつきのを繰り返し目撃してきた。鶴見にとって、状況変化を織り込まない思想は、あまりにも無批判的に思われたのだ²³⁾。

以上からすると、精密な論理と動いていく想像力という二つの道のうち、鶴見は、後者に期待をかけたと考えるのが自然だろう。実際、『戦後日本の思想』で鶴見が可能性を見たのは、現実への

自然主義的忠実さではなく、想像と現実の齟齬への着目である (SN, 200)。ある時点での実感を起点に、何らかの見通しを持って行動に移るのだが、しばしば、その行動の途上で、予期に反するような実感を経験する。鶴見は、その齟齬を記録するものとして、生活綴方を捉え直した。つまり、想像と現実の隔たりに直面する道具としての、「行動の記録として〔の〕生活綴り方的方法」に、可能性を見たのである (SN, 179)²⁴⁾。

理想と現実の落差に注目することで、現状を単体で受け止めるのではなく、理想との関係において現状を見ることになる。ここには、現状を突き放す視点が兆している。そして、この可能性を追求したのが、「方法としてのアナキズム」(1970)である。

4. 準拠枠としての生活記録 —— ソローのアナキズム

「方法としてのアナキズム」において、「アナキズムは、権力による強制なしに人間がたがいに助けあって生きてゆくことを理想とする思想」であると鶴見は定義する。彼の見るところ、アナキズムは、権力から自由になりたいという人間の——人間以外の動物も含むかもしれないと断っているが——のベーシックな欲求の表現である。それと同時に、「道義感から見て自明のことに思える権力ぬきの助けあいの社会」という理想が実現されたことがない点に彼は注意を向ける。このように、基本的な欲求ながら実現されないのが、彼は、アナキズムを「夢」と結びつけている²⁵⁾。

「現実的平和主義」を訴えた戦前の知識人が、それを貫き得なかったことを踏まえ、「夢想する時間」という「無駄なもの」の中に、彼は希望を見出した。個人の素朴な感覚に根ざして考えることを「夢」と言い換え、鶴見は述べる。

人間は皆裸で出てくるんだから、本来平等じゃないかという……〔発想〕から考えなければ、自分にとって守りやすい思想は出てこないと思うね。結局、拠り所は夢であり、繰り返し夢を見ることによってやわらかくする

態度なんですよ。夢はフレキシビリティを保つ。しなやかな行動の準備なんです。

夢という無駄な、現実的でない時間からこそ、貰かれうるしなやかな思想が生まれる²⁶⁾。「夢」という表現によって、鶴見は、理想と現実の落差に焦点を当てた (M, 18)。こうして、齟齬を自覚しながら理想を思い描く能力は、佐藤忠男のいう「想像力」に通じている。

本稿の関心に沿って、「方法としてのアナキズム」の生活綴り方的側面に焦点を絞ると、鶴見の『ウォールデン』読解が目を引き、「個人のパーソナリティに根ざす」アナキズムとして、森での生活経験を記録したソローの『ウォールデン』が読解される箇所である (M, 38)。

ソローの「書き残した文章のほとんどが、彼自身の生活の物語」なのだが、特に生活記録である『ウォールデン』には、自己を離れた記述が見当たらないと鶴見は考えた。「どういう労働をしたか、どういう日課だったか、どのようにお金を使ったかがはっきりと書いてある」(M, 32-3)。『ウォールデン』の基調をなすのは、「～であると信じる」とか「～であってほしいものだが」といった形で表現される素朴な感覚に基づくアナキズム的理想である (M, 31-2)。森での生活は、こうした感覚に基づく「単純な生活の実験」だったのだ (M, 35)。その実験は単純化された形で理想を試すがゆえに、想定と現実との齟齬を意識させる。森で生活した「二年間は、ソローにとってその後どのような生活状況に対しても、ひとつの準拠わくとしてはたらいた」(M, 34)。ソローの『ウォールデン』に形象化された齟齬の記録は、その後のどんな状況をも突き放し、相対化するための視点を提供したのである。

こうして相対化を強調する背景について、鶴見はこう書いている。

権力的支配のない社会などという理想主義的なことをいうと、「そんな中学生みたいなことを言うな」と社会人から笑われるが、現代の社会の複雑なルールを一度は、もっと単純なルールにもどして考え直すべきなのだ。そ

うでないと、われわれは、今偶然にわれわれをとりまいている社会制度に引きずってゆかれるだけになる。(M, 35)

個人的な感覚に根差した小さな実験は、状況を相対化の根拠地となりうる。というのも、個人的な感覚の背後にある理想と、現実との落差は、現状に対する疑問につながりうるからだ。理想と現実の齟齬が、今とは別様の社会生活の起点となり、社会の歴史的な偶然性に気づかせてくれると考えた。こうした可変性の自覚が、社会全体を突き放す視点をもたらすのである。(M, 36)

ここで、鶴見の発想のねじれを確認しておこう。目下の体系を、不変で唯一の解答とみなすことは、一見して堅固で確実な知をもたらすようである。しかし、そうした厳密さに素朴に飛びつく人は、その都度の解答を追認しているに過ぎない。状況が変わると、その都度の模範解答も変わる。それゆえ、結果として状況主義的になり、容易く意見を変えてしまうことになる。一方、重層性や曖昧さを重視すると、一見、こころ意見を変えることになりそう。しかし、別の仕方を繰り返し想像することは、自己認識の前提に、偶然性・可変性への自覚を置くという柔軟な構えをもたらすので、結果として、個別の状況変化を貫いて、自身の思想を守るための「独立性」が可能になる。

かつての生活綴方論の限界を補うように鶴見が発展させたのは、理想と現実の不一致に直面して、あれこれと想像することに状況全体を相対化する視点を見出すものだった。そうした齟齬の典型例を持つために、個人の素朴な感覚に基づく生活上の実験を彼は推奨する。さらに、その生活実験を記録することで、自己は、繰り返し立ち返りうる相対化のための根拠地を持つことができるというわけだ。

鶴見が、齟齬に対峙しつつ想像を働かせるということにより達成しようとしているのは、「しなやかな行動の準備」とも呼ばれる、柔軟な「態度」である(KK, 308)。ここには、状況変化を貫いて成立するような、ある種の自律性が兆している。

ここでいう「態度」は、彼が留学中に摂取して

いた社会心理学の主要な語彙の一つであり、一定の対象ないし場面においてとりうる行動の可能性や傾向のことを指す。とりわけ鶴見が影響を受けた社会心理学者の G. H. ミードは、ある対象との関係において「様々な仕方で行為する準備(readiness)」, 様々な習慣における「何らかの体制(an organization)」, 「組織化された反応(organized responses)の系列全体」とそれを説明している²⁷⁾。鶴見が状況全体を突き放すことを目的としている以上、ここでいう「しなやかな行動の準備」も、個別の態度でなく、態度一般を意味している。彼は、その一般的態度の方向づけを生涯模索し、内実を与えようとした。「間違いの記憶」に基づく可謬主義(fallibilism)の議論や、良識(decency)として名指したものは、その一例だと考えられる²⁸⁾。

これらも重要な論点なのだが、本稿で掘り下げる紙幅はない。本稿では、彼が確保しようとした独立性の条件にこだわろう。というのも、生活実験に関する「経験を書く」ことが、相対化のための根拠地になり、ディーセントであるために役立つとしても、とにもかくにも、自己の経験を記録しさえすればよいわけではないはずだからだ。どのような記録であるべきなのだろうか。彼の求める独立性が、自身の過去、とりわけ、マイナスの準拠棒(M, 36)とも呼ばれる「間違いの記憶」に支えられるものだとすれば、「経験を書くこと」をめぐる鶴見の文章の中で、適切な生活記録のための条件が検討されていると考えられる。以下では、生活綴方論・アナキズム論を経て展開された、彼の文章論に注目しよう。

5. 原体験への誠実さ ——期待と回想の次元

1979年の講義を基に、1980年に『文章心得帖』が出版された。この本で、鶴見は自分の経験を書くことについて語るとき、経験を「原体験」と「体験」の二種類に分けている。原体験は、「体験を解釈する一種のカギ」となって残るのに対して、個別の体験は、習慣化されており、反復可能な出来事として生きられる。原体験の機能は、それ以

降の経験を捉える上での参照点として、それらを相対化していくことであり、ある種の実験的な生活が持つ準拠枠の役割と同一である。ここまでは「方法としてのアナキズム」と変わらない。ただ、興味深いことに、原体験は誰にでも無遠慮に共有すべきでないという視点が付加されている。少なくとも鶴見自身は、「それを言うってしまうことで、それがいったいどれだけの力を自分に対してもつのか、たいへん疑わしい」ので、自身の原体験をあからさまに言いふらしたり、書き散らしたりしたくないという²⁹⁾。

一方で、実際（特に晩年）の鶴見は、そうした原体験に相当する経験を繰り返し語り、いじめ・万引き・放校・自殺未遂などに代表される悪人としての自分の過去や、家族との関係、戦中・戦後の自身の行動や微妙な心理を執拗に言語化している。また、原体験を言語化することへのためらいを指摘しながら、直後では、山中恒やアグネス・スモドレーらの文章化された原体験について好意的に紹介している。鶴見を好意的に読む限り、原体験を言語化すること自体が問題なのではないのだろう。では、彼は何をためらったのか。

『文章心得帖』において、彼は「紋切型」の文章をひたすら批判した。少し洒落た言い方や気取った表現をしようとするとき、かえって、自分の立場や正確や気分を離れて、他の人が「普通に思いつく文章」を書いてしまうものだ（BK, 54-64）。紋切型は、「人のペースに巻き込まれ」た言葉であり、「自分の肉声」を失っているながら、自分自身の声であるかのように錯覚させる（BK, 18-20）。

きれいに割り切れているというものは、かならずしもいい文章ではないのです。（中略）書き慣れたことを、〔他の〕人が書くようにスラスラ書いたのでは、いい文章なんて生まれるはずがありません。（BK, 70-1）

書きやすさに任せて紋切型を用いることで、経験解釈の決定を類型的な見方に預けないこと、鶴見がこだわったのは、この点に他ならない。

彼は、それを「誠実さ」の問題と言い換える。

文章には、わかりやすさや明晰さが求められると言う。しかし、それ以上に同書で紙幅が割かれるのは、自分の経験への誠実さである（BK, 97-101）。鶴見のためらいは、誠実さの欠如に対する心配に由来する。原体験を安易に言語化することで、書きやすさに身を任せ、自己を粉飾し、偽善などの悪感情を抑圧してしまうことを鶴見は心配していたのだ。

とはいえ、誠実さはどのようにして確保できるのか。社会人類学者のロバート・レッドフィールドの「期待の次元」と「回想の次元」という概念に依拠しながら、彼は説明する。

〔後から見ると〕もとはこういうものだったと単純に解明することは後知恵であって、社会学の言葉を使えば「回想の次元」で切り捨てることなんです。「期待の次元」で見ればかならず……〔何らかの誤認や幻想〕が跳梁しているんですよ。期待の次元と回想の次元を区別して、回想の次元だけで終わらせるのが科学主義だとすれば、そうではない期待の次元における思想というものを私はなるべく大切にしたいと思っています。（KK, 521）

過去の時点からすると、「未来は自分の不安と期待が混じり合って見える。〔しかし〕その時期から十年二十年たってから振り返って見るときには、不安と期待なしに見えるわけですから、あたかも自分に先見の明があったように書け」てしまう。当時の視点（＝期待の次元）から書くことと、後代の視点（＝回想の次元）から後知恵的に書くことを鶴見は峻別する。そして、あくまで当時の自己の経験を離れずに書き、自分に不利であっても、「誤認」や「幻想」を隠さないことこそが必要だと鶴見は主張したのである。（KK, 359-61）

1980年の講演で、過去の自分を粉飾し、「しばしば歴史の偽造をはかる」という人間の傾向に鶴見は言及している。人間は弱いので、過去の自分を現在と同じだけの知恵を持っているかのように偽装する「誘惑」に常に駆られており、『期待の次元』によって生きたことを、『回想の次元』とごちゃまぜにして書きがちである。その典型と

されるのが『鎖国』の和辻哲郎である³⁰⁾。

和辻は、戦前に『日本の臣道・アメリカの国民性』を書いたにも関わらず、敗戦後には、戦前の日本を「愚挙であった」が、日本人には才能があったのだから、外へと向かう冒険精神さえあれば、あんな愚かな真似をせずに済んだと結論する『鎖国』を著した。こうした身ぶりを、よく見せるべく後知恵的に「歴史の偽造」をはかるものとして、鶴見は激しく批判する。『鎖国』には、「和辻哲郎の思想家としての知的独立性を証明するものがとほしい」。むしろ、当時の自分には世界がどう感じられていたかを誠実に書くべきだった。それなくしては、状況の中の引き継ぐべきものと批判すべきものと選別せずに受け入れて追認し、結果として、知的独立性を失うことになる、と(SS, 12-7)。和辻は、「間違いの記憶」をなかったことにしようとしたのだと言えるだろう。

それに対して、吉田満の『戦艦大和ノ最期』を「『期待の次元』にピタッと固執して書いた実に数少ない〔原体験の〕記録」として彼は評価する。しかも、その後の吉田は、その原体験すら突き放して「見る目」を育てた。というのも、数十年後に出された『戦中派の死生観』で、吉田は「回想の次元」に徹して『戦艦大和ノ最期』を「自己批評」したのだ。それにより、当時は「国家の命令が下った以上、これに服従する以外にないというふうに、あのころはまっすぐ考えた」のだが、実際は、自殺による抵抗、サボる、徴兵忌避など様々な選択肢がありえたことを踏まえた上で思索を進める「幅」が、吉田に生まれることになった。(SS, 18-53)

「期待の次元」において自己の経験を書くこと抜きに、一足飛びに自己反省していたとすればどうだろうか。恐らく、紋切型の反省に飛びつき、状況主義的な解釈で、自身の原体験を染め上げ、自分の過去を偽造・粉飾しかねなかっただろう。鶴見が原体験の言語化をためらっていたのは、「回想の次元」による不誠実な言語化で原体験を美化してしまうと、原体験から自己を動かす「力」を奪ってしまうからだだったのだ(BK, 76)。

原体験が自己に対して持つ「力」として鶴見は何を思い描いているのだろうか。そもそも、原体

験は、それ以降の経験にさえ影響を及ぼすほど、無視できない影響力を持っている（だからこそ準拠枠になる）。恐らく鶴見は、自己を動かす「力」ということで、それ以上のことを言っている。原体験という巨大な（間違いの）「記憶」を「期待の次元」で記録することで、繰り返し立ち返りうる形で当時の視点が保存される。結果として、原体験と適切に付き合うことで、過去を粉飾せずに、その状況でどう振舞えただろうかと想像することが可能になっている。つまり、準拠する経験を、美化せずに想像的にリハーサルすることで、状況を相対化するだけの「幅」を達成することができるのである。自己への「力」ということで、原体験は、自律性を確保するための源泉として、繰り返し立ち返るべき価値がある、と鶴見は言おうとしていたのだ³¹⁾。

6. お わ り に

鶴見の生活綴方論は、実感を評価するものから、状況全体を突き放す視点（＝独立性）の有無を評価するものへと転換していった。そのとき、突き放す視点の梃子となるのが、想定と現実の齟齬、理想と現実との落差である。自身の素朴な感覚に基づいて生活上の実験を行ない、それを記録することを鶴見は勧める。それは、状況を相対化する準拠枠として働くからである。ただし、それを無批判に実践すると、経験した当時の視点（期待の次元）と、後知恵的な視点（回想の次元）とを混同して、自身の過去を偽造し、美化する誘惑に駆られてしまう。「誠実さ」を主題的に論じる中で、状況全体を突き放すことができるような「独立性」を得しようとしたのである。

一点、補足しておきたい。自律性・独立性を求める背景には、戦前生まれで、政治家の家系に生まれた彼の様々な経験がある。しかし、それ以上に、本稿で扱った文章が書かれた社会背景が注目されてよい。相対化が全面的に強調された「方法としてのアナキズム」には、鶴見が立ち上げに関わった「声なき声の会」や「ベ平連」などの社会運動の跡が明確に残っている。これらはいずれも、それ以前の軍隊的に組織化された社会運動とは異

なり、ごく開かれた雰囲気があったことで知られる。鶴見は中心人物として、運動の主張に共感し、果敢に行動していた。しかし、その最中に、ソローに寄り添って、道行きの多様性を静かに肯定する「いくつもの太鼓のあいだにもっと見事な調和を」(1960)などの文章を残してもいた。果敢に行動するその瞬間に、当の自分の行動すら含めて、状況全体を突き放すような文章を書いたのだ。本稿で明らかにした鶴見による独立性の肯定の中にも、運動の中での「足並みの乱れ」への共感を読み取る必要があるだろう³²⁾。

注

- 1) 本稿の前半部分は、教育・保育・人間形成論研究会第三回での招待講演「鶴見俊輔と後悔する想像力：生活綴方、佐藤忠男、中野重治」にて発表した。当日コメントをくださった方々に感謝したい。
- 2) 『鶴見俊輔集2 月報7』(1991年10月)9頁
- 3) 少年時代の不逞行為は、鶴見俊輔・黒川創『不逞老人』(河出書房新社 2009年)、戦争体験は、鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二『戦争が遺したもの』(新曜社 2004年)、他者からの批判については、『鶴見俊輔集2』(筑摩書房 1991年)403-30頁を見よ。
- 4) 鶴見俊輔・重松清『ぼくはこう生きている 君はどうか』(潮出版社 2010年)104頁
- 5) 鶴見・上野・小熊『戦争が遺したもの』17-22頁
- 6) 『山びこ学校』の評価は、奥平康照『「山びこ学校」のゆくえ 戦後日本の教育思想を見直す』(学術出版会 2016年)23-74頁を参照。
- 7) 『思想の科学』no. 4, 1954年8月号に記録がある。出席者は、日高六郎、無着成恭、武谷三男、高橋甫、関根弘、鶴見和子・俊輔ら。
- 8) 鈴木三重吉『綴方読本』(講談社 1987年)64-8頁 鶴見が参照したのは中央公論社版だが、現在比較的入手しやすい講談社学術文庫版を本稿では参照した。鈴木は夏目漱石門下にあたり、児童文学誌『赤い鳥』の創刊で知られる。
- 9) 芦田や鈴木に加え、小砂丘忠義・野村方兵衛、北方性教育(国分一太郎ら)を含めた系譜を描くが、やはり、生活綴方の基本枠は芦田・鈴木にあると鶴見は見えていた(久野収ほか『思想史の周辺』(人文書院 1972年)70頁)。なお、芦田・鈴木を鋭く批判した国分一太郎が、鈴木らを「粗末に扱ってきたことを反省する」と述べた(同書79頁)ように、彼等の枠組みの重要性は、批判者にすら共有されているので、鶴見の見立てにも一定の妥当性があると思われる。
- 10) 久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』(岩波書店 1956年)113頁以下、同書からの引用は、(G, 頁数)で表す。
- 11) 生活綴方は、互いの作文を読み合わせ、批判し合い、改訂していくような対話的な共同性・集団性を持つと指摘される(cf. 奥平『「山びこ学校」のゆくえ」30-1頁など)。鶴見もこの点を認識している(G, 113)。
- 12) 久野ほか『思想史の周辺』69-70頁
- 13) 丸山眞男『日本の思想』(岩波書店 1961年)53-9頁 初出は1957年。以降、同書からの引用は、(N, 頁数)と表記する。
- 14) 鶴見俊輔「プラグマティズムと生活綴方」日本作文の会編『生活綴方事典』(明治図書出版 1958年)78頁
- 15) 久野収・鶴見俊輔・藤田省三『戦後日本の思想』(岩波書店 2010年)172-4頁 同書のうち、生活綴方を論じた「大衆の思想」の初出は1958年。以降、同書からの引用は(SN, 頁数)と表記する。ところで、その後、『思想の科学』全体の方向としては、「実感」概念が放棄され、「日常性」概念へとシフトしていく。この点は、横尾夏織(2010)『「実感」論争と『思想の科学』『学術研論集』16号148-163頁に詳しい。
- 16) 佐藤忠男『なんのために学ぶか』(筑摩書房 1976年)83頁
- 17) 佐藤忠男『少年の理想主義』(明治図書出版 1964年)からの引用は(SR, 頁数)と表記する。
- 18) 野間宏は生活綴方の科学的側面と文学的側面の片方のみによって生活綴方を理解しないようにと主張したのだが、佐藤忠男は、二重性を踏まえた上で、分割を主張するので、野間の批判がある面でクリアしている。野間宏『野間宏全集』20巻(筑摩書房 1970年)266頁を参照(初出は1960年)。
- 19) 佐藤忠男『言葉の論理と情念』(国土社 1971年)16, 48-9頁 芦田を例に生活綴方が批判されている。佐藤忠男『権利としての教育』(筑摩書房 1968年)169-77頁も参照。
- 20) 野間は、生活内にも当然ある醜い感情を、冷静に見据えた上で解放するという生活綴方の課題を指摘している(『野間宏全集』20巻276-7頁)。
- 21) 想像力が自己の独立性に関わる以上、各人の「個性」を育む役割を果たしてもいる。佐藤『言葉の論理と情念』176-7頁
- 22) 黒川創編『思想をつむぐ人たち』(河出書房新社 2012年)449-50頁 鶴見とホワイトヘッドについては、森元斎『具体性の哲学』(以文社 2015年)4部3章を見よ。
- 23) 網野善彦・鶴見俊輔『歴史の話』(朝日新聞出版 2018年)124-33頁
- 24) 重層性と揺れの認識は、彼が「ジャコメッティの嘆き」と呼ぶ、対象の汲みつくせなさに支えられている(網野・鶴見『歴史の話』146頁)。ジャコメッティが肖像を描こうとして常に未完成に終わるというエピソードを受けて、「一人の人間を描く」こと、ひいては、「社会の最終的な像をつくる」ことの不可能性を指摘している(同書140-2頁)。

- 25) 黒川創編『身ぶりとしての抵抗』(河出書房新社 2012 年) 17-8 頁 本書からの引用は (M, 頁数) と表記する. アナキズム研究者の森元斎は『アナキズム入門』(筑摩書房 2017 年) 12 頁, 254-5 頁で鶴見の定義を激賞している.
- 26) 鶴見俊輔『期待と回想』(朝日新聞社 2008 年) 307-8 頁 以降 (KK, 頁数) と表記.
- 27) Mead, G. H., *Mind, Self and Society*, (Chicago : University of Chicago Press, 1934), p. 12, p. 126. 鶴見の態度概念は, メタ倫理学者 C. L. スティーブンソンの「信念における不一致」と「態度における不一致」という区分を維持しながら (KK, 367-73), 後者の「態度」の内実を社会心理学の「態度」概念によって置き換えたような含意を持っている. Stevenson, C. L., *Ethics and Languages*, (New Haven : Yale University Press, 1944), ch. 1. なお, 態度概念は, 著名な社会心理学者のオルポートが, 当時の基本的な分析単位として, 本能・習慣・感情と並んで挙げるほどポピュラーな概念だった (Allport, G. W., "The Historical Background of Social Psychology", In Linzey, G. (ed.) *Handbook of social Psychology*, vol. 1 (MA : Addison-Wesley, 1954) pp. 3-56.). 社会心理学内での態度概念のサーヴェイとして
- は, 島田一男『社会心理学の基底 態度の心理学』(大日本図書株式会社 1963 年)を参照.
- 28) 間違いの記憶については, 網野・鶴見『歴史の話』104 頁以下を参照. 鶴見の decency に対する言及は『教育再定義への試み』(岩波現代文庫 2010 年), 鶴見の思想を decency の下で解釈しようとする試みとして, 那須耕介『バーリンという名の思想家がいた』(編集グループ SURE 2010 年)がある.
- 29) 鶴見俊輔『文章心得帖』(筑摩書房 2013 年) 75-7 頁 以降 (BK, 頁数) と表記.
- 30) 鶴見俊輔『戦後思想三話』(ミネルヴァ書房 1981 年) 20-1 頁 以降 (SS, 頁数) と表記.
- 31) Femire, S. *Moral Imagination*, (Ind : Indiana University Press, 2003) で論じられるように, デューイは, 想像力を「演劇のリハーサル」を遂行する能力として捉えていた. ある状況下で自分がどのように振舞うかを繰り返し熟慮する能力のことである. 演劇的想像力とデューイなら呼ぶものを, 鶴見は暗示していたのだと考えられる.
- 32) 鶴見は後に「人間がバラバラであることの重大性を悟らなければ」と, より端的に述べている. 網野・鶴見『歴史の話』103 頁

Shunsuke Tsurumi on Writing, Recording, and Relativizing —— From Writing Education (Seikatsu Tsuzurikata) to Imagination ——

Yoshihiro TANIGAWA

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary This paper explores the arguments of Shunsuke Tsurumi, on "writing life experiences", putting one's own experiences into words. His criticisms on "straight-A" people are instructive to this inquiry. They naively follow the so-called "right answers", and in the end they lose their intellectual autonomy. He takes up the educational practices of Seikatsu Tsuzurikata (life experience writing) to cope with this loss of autonomy. This paper is intended to reveal how he presents the possibilities of writing to relativize the situations as a whole. The disagreement between the ideal and the real is associated with our imaginings. He claims that this disagreement works as a place to rehearse one's own experience repeatedly, if it is recorded in the level of "expectations" at that time. This is the criterion he presented to achieve the autonomy in our attitudes.